



JOURNAL of CROHN'S and COLITIS
日本語版

JCC公式

毎月1日更新

*1日が休日の場合は翌営業日に公開予定

<https://ecco-jcc-jpsh.spiral-site.com>



JCC JOURNAL of CROHN'S and COLITIS
日本語版

編集委員長
北里大学北里研究所慢性炎症性腸病非先進治療センター
センター長、原研開発学名誉教授
日比 紀文 先生

2021年12月15日 Volume1を公開しました。次回は2022年1月7日の公開を予定しています。

**下部消化器領域トップのImpact Factorを誇る専門誌
JCC (Journal of Crohn's & Colitis) の最新号の中から
厳選された2論文の日本語サマリーを毎月配信**

JCC JOURNAL of CROHN'S and COLITIS
日本語版

Vol. 1-1

**潰瘍性大腸炎においてバリデーションされた
病理組織学的活動性指標は大腸腫瘍の発生を予測する**
Validated Indices for Histopathologic Activity Predict Development of Colorectal Neoplasia in Ulcerative Colitis

Rish K. Pai*, Douglas J. Hartman, Jonathan A. Leighton, et al.
Department of Pathology and Laboratory Medicine, Mayo Clinic, Phoenix, Scottsdale, AZ, USA
Journal of Crohn's and Colitis, 2021; 15(5): 1483-1493.
doi:10.1093/ecco-jcc/jjab042

背景+目的
潰瘍性大腸炎(UC)は大腸腫瘍発生の重要なリスク因子であり、大腸上皮での慢性炎症により誘発された遺伝子変異が癌をきたすと考えられている。UC患者に対して、前がん病変の検出および予防を目的としたサーベイランス大腸内視鏡検査の実施が各種ガイドラインで推奨されている。最近、UC患者における大腸腫瘍発生のリスク因子として組織学的活動性の重要性が示されたが、これに基づいてサーベイランス検査を最適化すべきかどうかについては一致した見解が得られていない。現行のガイドラインの中には目的の組織学的活動性の利用を推奨していないものや、推奨しているも病理組織学的活動性の定義が明確でないものがある。組織学的活動性の利用可能な原因の一つは、Geboesスコア、Nancy Histopathologic Index (NHI)およびRoberts Histopathologic Index (RHI)などのバリデーションされた組織学的指標を用いて予後を解析したデータがないことである。これまでに大腸腫瘍発生のリスク因子としてNHIを評価した試験が1件だけあるものの、対象患者の大半がクローン病患者であったなどの限界がある。そこで今回、UC患者における大腸腫瘍発生予測での組織学的活動性の名前を明らかにし、腫瘍発生リスク上昇と関連する組織学的活動性の最低値を定める目的で、サーベイランス大腸内視鏡検査で観察された組織学的活動性と大腸腫瘍発生との関連性を評価する症例対照研究を実施した。

方法
本試験の対象は、Pittsburgh大腸内視鏡センターおよび

JCC JOURNAL of CROHN'S and COLITIS
日本語版

Vol. 1-1

表1. 組織学的活動性と大腸腫瘍発生との関連性を評価する目的で組織学的活動性指標を比較した多変量解析

組織学的活動性指標	Roberts Histopathologic Index (RHI)	Nancy Histopathologic Index (NHI)
調整済みオッズ比	1.04 (0.39-1.66)	1.05 (0.39-1.28)
95% CI	0.39-1.66	0.39-1.28
P値	0.001	0.001
調整済みオッズ比	1.03 (0.39-1.66)	1.05 (0.39-1.28)
95% CI	0.39-1.66	0.39-1.28
P値	0.001	0.001
調整済みオッズ比	1.04 (0.39-1.66)	1.05 (0.39-1.28)
95% CI	0.39-1.66	0.39-1.28
P値	0.001	0.001

結果
A. 観察された前5年間の平均RHIによる層別化
B. 観察された前5年間の平均NHIによる層別化

結論
UC患者計174例からサーベイランス大腸内視鏡検査中に大腸生検で採取された計764検体を解析した。多変量解析の結果(表1)、全サーベイランス期間および観察された前5年間の平均RHIおよび平均NHIは大腸腫瘍発生と有意に関連し、それぞれの前5年間のスコアより

編集委員長のご挨拶

炎症性腸疾患 (Inflammatory Bowel Disease: IBD) と総称される潰瘍性大腸炎とクローン病は、腸に慢性の炎症をきたす疾患であり、その発症機序は現時点では完全には解明されていない。

JCC (Journal of Crohn's and Colitis) は ECCO (European Crohn's and Colitis Organisation) が発行するIBDに関する専門誌であり、基礎から臨床まで幅広い論文が掲載されている。ECCOの熱意ある若手会員の努力もあり、質の高い雑誌となっている。JCC日本語版では、JCC本誌に掲載された原著論文の中から毎月2報を取り上げ、日本語で要約して掲載する。この領域に携わる第一線の専門医の方々が編集委員として論文を監修し、IBD診療にかかわる日本の医療従事者にとって有益かつ興味深いと思われる情報を簡潔にまとめている。



北里大学北里研究所病院
慢性炎症性腸病非先進治療センターセンター長
原研開発学名誉教授
日比 紀文

IBDは、近年の患者の増加とともに診断法・治療法が発達し、未だ根本治療はないものの多くの新治療も開発され、速やかな寛解導入と寛解維持治療により、多くの患者が通常の生活を送れるようになってきている。寛解維持治療は長期にわたることから、医師だけではなく、看護師、薬剤師、栄養士、社会福祉士などの様々な医療従事者の連携によるチーム医療が重要となっている。このような状況下、専門医のみならず一般医や医師以外の医療従事者の方々が、手軽にIBDに関する最新情報を得られることは重要と思われる。

JCC日本語版がIBD診療に携わるすべての医療従事者の一助となることを願う。



JOURNAL of CROHN'S and COLITIS

日本語版

JCC公式

毎月1日更新

*1日が休日の場合は翌営業日に公開予定

https://ecco-jcc-jpsh.spiral-site.com



Point 1. 掲載サマリーはPDFでダウンロード可

サマリーはPDFをダウンロード (&プリント) してご覧いただけます。

Point 2. 編集委員によるポイント解説

毎号編集委員によるサマリーごとの解説をご覧いただけます。

Point 3. わかりやすいカテゴリ検索

「診断・評価法」「治療」「疫学」「予後」「基礎」などカテゴリごとにサマリーをソートしてご覧いただけます。



**JOURNAL of
CROHN'S and COLITIS**
日本語版 **JCC公式**

毎月1日更新

*1日が休日の場合は翌営業日に公開予定

<https://ecco-jcc-jpsh.spiral-site.com>



編集委員長

日比紀文先生

北里大学北里研究所病院炎症性腸疾患先進治療センターセンター長
慶應義塾大学名誉教授

編集委員（五十音順）

遠藤克哉先生（東北医科薬科大学医学部内科学第二（消化器内科）講師）

小林拓先生（北里大学北里研究所病院炎症性腸疾患先進治療センター副センター長）

新崎信一郎先生（大阪大学大学院医学系研究科消化器内科学講師）

仲瀬裕志先生（札幌医科大学医学部消化器内科学講座教授）

久松理一先生（杏林大学医学部消化器内科学教授）

松岡克善先生（東邦大学医療センター佐倉病院消化器内科教授）